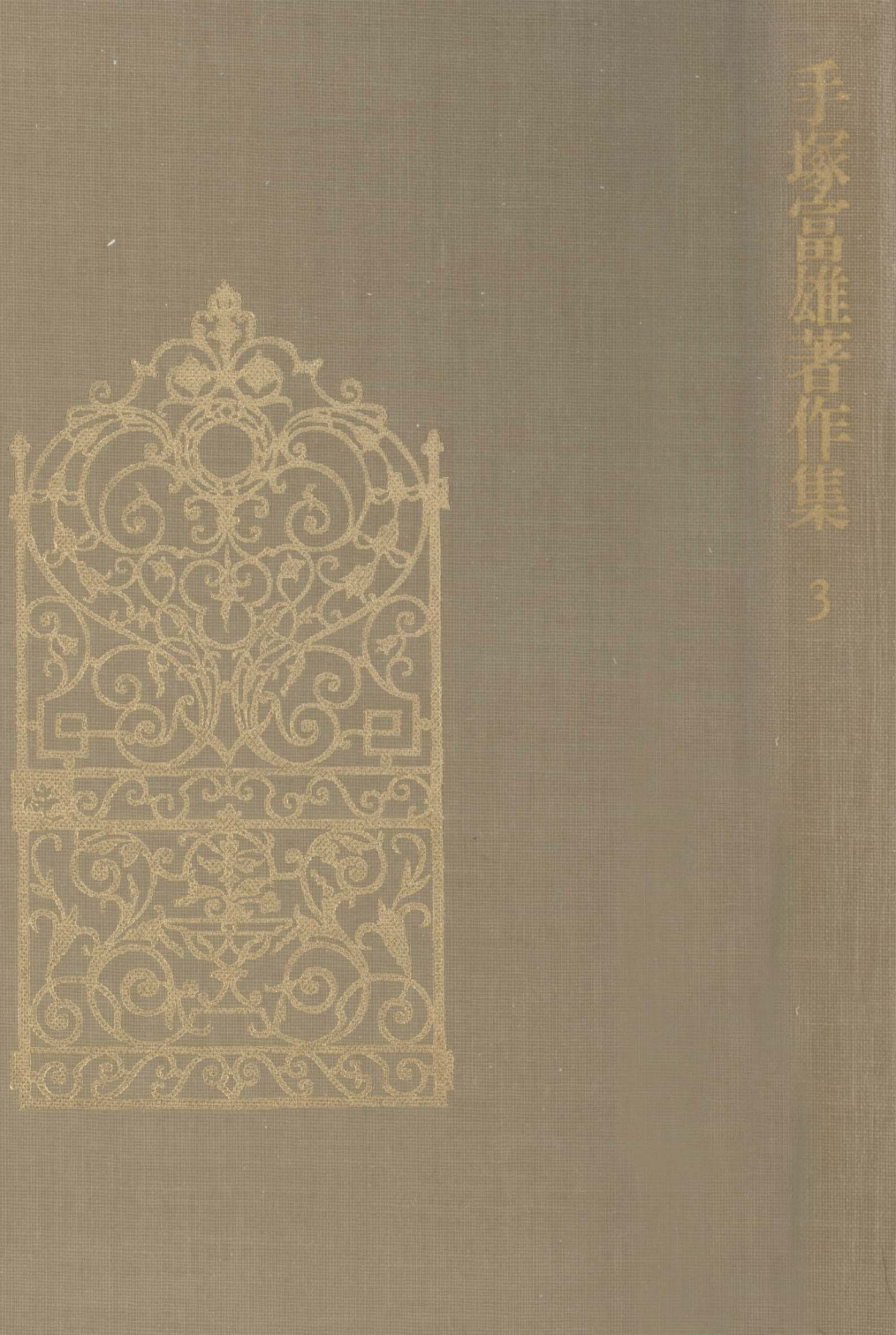
手塚富雄著作集
3

手塚富雄著作集

3

手塚富雄著作集　第三巻
定価四三〇〇円
昭和五十六年五月　十　日印刷
昭和五十六年五月　二十　日発行
著者　手塚富雄
発行者　高梨茂
印刷者　青木勇
発行所　中央公論社
〒104　東京都中央区京橋二―八―七
振替東京二―三四
©一九八一　検印廃止

手塚富雄著作集　第三巻

ゲオルゲとリルケの研究　上

目次

第一章　序論――文芸学上の諸問題におよぶ

本書の課題　「ゲオルゲとリルケ」の一対　批判的立場から　本書の研究法の重点　インタープレタチオンについて　個と歴史　文芸評価の問題　文芸評価の規準の多元と一元　様式批判の要請　一元的文芸評価のための試論　主観性の問題　外国文学研究の立場の自覚　評価における歴史性の問題

第二章　両詩人をめぐるヨーロッパの精神状況　二六

「流れのなかの声」に見られるゲオルゲの詩の性格　「成長したおとめ」等に見られるリルケの詩の性格　両詩人の詩業の共通の基盤・近代ヨーロッパ精神の推移ならびにその危機　近代ドイツ文学の展開　ドイツ自然主義およびその精神動向　ニーチェによって開かれた精神の自覚形態　文学史におけるニーチェの影響　ニーチェの言葉「神は死せり」とその形而上学的解釈　詩人と「神は死せり」と　両詩人の歴史的境位とニーチェとのつながり

第三章　芸術の自主性の自覚と詩におけるその系譜　七一

両詩人に共通するものとしての芸術の自主性の自覚　芸術のありかたの諸相　近代における生の意志の肯定と実践　生と芸術の同一性　フランス象徴派の詩精神とボードレール　マラルメにおける絶対のありかた　ニュアンスによる象徴の詩人ヴェルレーヌ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

ランボーにおける全一　ヴァレリーの「純粋な練習」

第四章　出生と詩人への生成　一〇一

A　ゲオルゲのばあい――その根柢と発展の方向　一〇一
ラインの子ゲオルゲ　アンティーケの浸潤　カトリック的基音　郷土的根柢　両親の性格　語学能力の卓越　詩人の遊歴とフランス象徴派詩人との接触　伴侶獲得の第一歩　ホーフマンスタールとの交友・ゲオルゲの対人関係の原形式　「芸術草紙」の創設とその志向　詩語獲得の努力・その二元性と形式への意志

B　リルケのばあい――プラークから世界へ　二二五
プラーク市の性格　家系と父母　仮装と芸術　世界へ開く機縁　軍学校の問題　詩作上の発展・プラーク時代の詩作段階　リルケ的なものの萌芽・芸術と世界へ　ヤコブセンへの傾倒　ルウ・アンドレアス＝サロメとの出逢いと芸術衝迫　リルケの精神的故郷　ロシヤ　ロシヤにおける神体験　リルケの芸術作業における雑種性　ウォルプスヴェーデの間奏曲　ロダン体験　不安の空間

第五章　詩業の第一階梯　一七六

A　ゲオルゲの初期の作品――詩世界の「王者」の運命　一七六
『手習帖』等　『讃歌』『巡礼行』『アルガーバル』『三つの書』の主性格　『牧人歌と頌歌』『伝説と歌謡』『空懸かる園』

B　リルケの初期の作品――「神」の名を経て

最初期の試作　『家神へのささげ』『夢を冠に』『降臨節』『わがための祝い』『時禱詩集』における神　第一部「修道士の生活の巻」　第二部「巡礼の巻」　第三部「貧困と死の巻」『形象詩集』

注

ゲオルゲとリルケの研究　上

第一章　序　論——文芸学上の諸問題におよぶ

本書の課題

シュテファン・ゲオルゲとライナー・マリーア・リルケとが、十九世紀末から今世紀にわたってのドイツのもっとも注目すべき抒情詩人に属していることは、あらためて多くのことばをついやすまでもないと思う。本書はその二人を、とくに全体として見たその詩業において比較し、比較することによって、それぞれの特質と史的位置をより的確につかむことを目ざすと共に、それをあきらかにすることが、現代文学のありかたをその境位や動向などにおいて捉えることに資することを期待したのである。その現代文学の境位云々とは、もちろんドイツ文芸のなかでのそれをさすだけではなく、ヨーロッパ、さらにひろくはこんにちの世界ぜんたいの精神的状況と密接なかかわりをもち、われわれの刻下の内面の諸問題とも触れあうものであることは、叙述のうちにしだいに明らかになるであろうし、ぜんたいとしては、この二人の詩人の研究を通じて、われわれの精神の進むべき路をよりよく見さだめようとすることに何らかの意味で参与したいと願うのである。

「ゲオルゲとリルケ」の一対

著者がそのような期待をみずからにかけることの裏には、抒情詩人としてのゲオルゲとリルケとは、現代文学の動向の代表的指標の中での重要な存在であるという見解がひそんでいる。その見解は、ひとつには文学、とくに現代文学において抒情詩のしめる位置から来ており、またひとつには、そのなかにおけるこの両詩人自身の詩業の性格から来ているのであって、その詳細は順を追って述べることになるが、ここでは、なぜこの両詩人を数ある現代の詩人のなかから取り出し、それを一組のものとして取りあつかうかということについて、一言しておきたい。

ドイツの現代抒情詩の展開において、その業績や影響力などによってもっとも顕著な存在と見なすべきものとしては、ゲオルゲ、リルケ、ホーフマンスタールの名が、われわれの念頭につねに最初にうかんでくる。あるいは、それらに先立つデーメルを加えることも可能であろうし、またヨーゼフ・ワインヘーバーをこれらと同列におくものもある。[1] さらに純度の高いその詩のひびきと特異な内的世界によって、ゲオルク・トラークルは、いよいよその価値を感知されつつあり、オスカー・レールケなどの意義の理解も時と共にすすんでいる。しかし、それらのことも、上述の三人の史的意義を軽くするものではない。文学史的にいえば、この三人は、自然主義文学につづいて、それと対立的な仕事をしとげた点で共同の陣営に属するのである。一八六八年生まれのゲオルゲは、一八七五年生まれのリルケ、一八七四年生まれのホーフマンスタールにたいして、先輩の位置にあったが、それでも彼ら三人が同じ世代の同じ系列の文学者であることは、誰しも異論の余地を見いだしえぬことである。ところでこの三人のうち、ホーフマンスタールは年少にして、完美した韻文形式の抒情的ドラマ「ティツィアンの死」や「痴人と死」などと共に、抒情詩によって、早熟の名をひびかせたが、その後かれは他の二詩人ほどには抒情詩に専念せず、戯曲、とくに喜劇に力をそそぎ、フェーイトン形式の随想や評論にも多く筆を染めたので、文学

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

的意義において他の二人におとるものではないが、全的にそれと詩業の比較をしあうことは、取り扱い上困難が多い。ゲオルゲとリルケとはそれに反し、生涯を通じその主力を抒情詩にそそいで、相まってその歴史における新段階を開いたものであるゆえ、当時のドイツの抒情詩に意をそそぐものは、その一者を考察するばあいには、おのずから多かれ少なかれ残る他者の考察にさそわれるのである。しかし、そういう自然の関係のほかにも、この二人を並置させずにおかぬことがある。それはまず、一見したところこの二人は、まるで対蹠的というべきありかたと行きかたをしていて、それぞれ独自の詩世界をたてたことである。ごく大づかみに言って、ゲオルゲのそれは男性的で剛毅、リルケのそれは女性的で柔軟で、望むならなおいくらでもこれに類した記号づけをすることができよう。それゆえにこの二人を比較することは、それぞれの特性をもって他の特性を浮き出させるというはたらきをする。この対蹠的な性格は一見したところそうだというだけで、より深部においては周密な検討を必要とするが、とにかくこの目につきやすい対蹠的性格が、まず比較対照による両人のより正確な理解をわれわれに意図させるのである。しかし、この二人を対照的にだけ見るのは、まだ事の全面をつくしているものでないことを思わねばならぬ。芸術上の同一世代に属する二人は、元来、その世代の負う課題と動機の中で芸術活動をしているのであって、その点では共に時代の子であることをまぬかれない。だから、そういう課題の果たしかたに、それぞれの強い個性によるいちじるしい対蹠性を示しているのは、両人を包んでいる同一なものを、二つの重要な側面からつかむ手がかりをなすものと見られる。こうしてこの二詩人は、対照によって相互を照明するとともに、それぞれがその部分として属している全体的なものの姿を、相まって明確ならしめるのに、好適の一対であると言える。そしてその全体的なものとは、前にも言った現代文学の境位や動向や運命などである。以上のことが、ゲオルゲとリルケを相関的にあつかうことの根本にある考えである。

批判的立場から

おそらく無意識のうちにも、上述のことが予感されるのであろう、文学史のほとんどすべては、この二人を隣り合わせてあつかっている。それは一種の習慣ともなっているが、それにもかかわらず、けっきょくは叙述の並置にとどまっているのが大部分で、ひろく深部にわたっての比較はいまもって充分には果たされていない状態である。それゆえ、この書は焦点を集中することによってその欠をいくぶんおぎなうことを願うのである。そのさい、著者が自覚的な態度としてとりたいと思っていることは、この二詩人を注目すべき顕著な存在と見ていることはもちろんであるが、価値については、それ以上には固定した予定的見解の上に立ちたくないということである。その点では、著者は既存の諸見解は参考とするにとどめて自身の批判的立場を手ばなさずに研究をすすめるつもりである。このことをことさらに言うのは、とくにこの二詩人について、過度に予定的見解が支配し、それが冷静な客観的研究をくもらしているように思われることがあまりに多いからである。讃美を前提としての「研究」が行なわれすぎ、「神化」にさえ至る。[2] ゲオルゲもリルケも共にその点では事を欠かず、現代文学の論述上の一奇をなしている。これはわが国だけのことではなく、ドイツがそもそもそのもとである。リルケの作品の蠱惑力、ゲオルゲのそれの威圧性がその原因をなしていると見られるが、それらをふくめて虚心の受け取りかたをするのが研究の前提で、最初から陶酔や畏れにみちびかれるべきではない。一方、批判の名のもとに貶価を前提とすべきでないこともいうまでもなく、逆の偏見に堕することも、つよく自戒しなければならぬ。最近はこの批判の点では、前記の行きすぎの反動もあり、両詩人にたいする検討は、時とともに客観性を増しつつある。しかしこの両人、ことにリルケにおいては、その全体像をあやまりなしにつかむのは至難のことで、そのためにはわれわれはいくらわれわれの批判力をつよめても、足りることはない。およそ予定的讃美は、かえって対象にたいする忠実さの欠如をあらわすものだろう。それは対象を単に完結的・静止的に把握し、みずからも静止的な立

場にとどまることになる。芸術上の享受と鑑賞に愛情がともなうとき、対象とそのような関係に立つのは、ありがちなことであるが、それはひっきょう鑑賞の領域のことであって、研究はそういう固定化にたいしてたえず反省を加え、凝固を破ろうとつとめるべきであろう。ことにこの両詩人を、現代文学の指標のひとつとして見ようとする立場をとるとき、どうしてそれをひたすら完結的に受け取ることができようか。現代文学は、そのすべての成員をふくめて、要するにひとつの大きい激動体として未来に向かっているのである。そこではたえざる探求と摸索がおこなわれ、多くの敢為なこころみも、その境位の巨大な不安との対決の努力なのである。何ぴとも至高の完成をほこりうるはずはない。

本書の研究法の重点

そのこととも関連して、本書の研究の方法について一言しておくことは、著者のまぬかれがたい責任であろう。方法を決定する根本的なものは、研究者が何を見ようとするかということ、つまり彼自身の問題提起のしかたである。したがって、著者が冒頭で述べたこの書の課題は、すでに研究の方法をその骨組において示しているわけである。それは再説するまでもないが、ただそのさい著者が自覚的につよい力点をおいて行なっていきたいことは、なによりも研究の基礎を詩業そのものの検討におくこと、すなわち詩作品を通ずるという研究方法を中心的なものとしてつらぬくことである。このことを特にいうのは、詩人の特質がもっとも強力にあらわれるのは、作品においてであり、作品との交渉をはなれては、文学研究の中核を逸することを思うからである。われわれがつかみたいのは、まず詩人が詩人としてなんであるかということであり、そして、そのなんであるかは、詩人が詩人としてなにをなしえたかということに凝集している。それが作品である。そして、その作品のなかには、詩人がなにをなしえたかだけでなしに、なにをなしえなかったかも、明白にあらわれている。ここで「なに」とは、

作品の形式、内容にわたるいっさいをさしているのであるが、作品において、それらを見ることをおろそかにすると、しばしば、その質の高下を無視し、ただそれらを概念による構成物とのみ見、無差別に材料化して、詩人の思想や「理念」の世界の再構成をはかることだけが行なわれる。それは、うまくいっても、詩人があろうと欲していることを、研究者の追補作用によって理想化して示すにすぎず、詩人の達成したものを正確につかんだことにはならぬ。問題は、詩人がいかなる考えを言ったかではなくて、それをいかに、いかなる力で言いえたかにある。また種々の変貌のもとにフェティシズム（崇物性）が、その態度と結びつくことも非常に多い。詩人の片言隻語のすべてに絶対の価値をおくのである。厳密にいうならば、詩人の書簡さえ、それを、詩人が真になにものであったかの証拠として用いるのには、細心の注意が必要であって、それらのすべてをそのまま受け取って詩人像をつくれば、一種の恣意的な構成におわることが多く、無用な矛盾と混乱の起こる可能性も少なくない。ヴォルフガング・カイザーは、彼の文芸学の大系を叙述した『言語芸術作品』のなかで、ゲーテの例をあげ、詩人がいろいろな機会に自己の作品について述べた言葉でも、けっしてつねに作品の解釈にたいして明瞭な助けとなるものではなく、吾人はしばしば混乱を感じ、時としては、詩人はさまざまの解釈に同意をあたえて、意識的に相手と共演をしているという印象をうける、という意味のことをいっているが[3]、こういうことはしばしば起こりがちである。われわれが正確な詩人像をえようとするならば、資料批判なしにそれをすることは許されない。そしてそのさい資料として最も重要で信頼しうるものは、作品そのものである。作品は厳正にそれ自体を語る。それは作者の意識的意図をも越えて、独自の性格をもつ独自の存在となるのである。ただし、こういうのは、作品以外の資料をいっさい排除するという意味では決してない。適正なものと認められれば、すすんでそれを活用し、併用すべきはむろんである。しかし、われわれの研究意図にとっては、作品が第一資料となるものであり、何よりもその検討を中心として研究がすすめられるべきことを、銘記しておきたいのである。

著者に以上のことを言わすのは、やはり在来の研究書にたいする不満から来ている。この両詩人の研究においては、その卓越さを疑いないものと前提する気もちが、多くの人をして、諸資料の質にたいしても無批判にならせ、それだけに部分的偶然的な把握にかたむくことが非常に多い。それらと対比して、著者は、詩人を詩人としての仕事において全面的につかむことをこの研究の第一義としたいと、より自覚的に考えるのである。ここでは、両詩人の思想を抽象して、それをなんらかの観点から整理することが目的ではない。両者の用いる特殊語のグロサリーをつくろうとするのでもない。伝記を目ざすのでもない。それらについては必要なかぎり考慮は払っているが、重点は前述したところにある。そのさい、われわれ研究者にとって感謝すべきことは、二詩人の作品のテキストが、ゲオルゲにおいては、詩人自身の配慮のもとに、リルケにおいては、研究の進みによる幾度もの照合増補によって、よい版本に恵まれていることである。作品、書簡等の出版は、これからもますます完備されるであろうが、現状でも本文批判の面にそれほど心を労することなしに研究をすすめることができるのは、二詩人が早くから高い評価をかちえたたまものであろう。この点では、二詩人にたいする一般的崇拝にたいし、不満をいういわれはないわけである。

インタープレタチオンについて

以上のように作品との交渉とその検討を基礎として行く方法は、とくにこの十数年来ドイツの文芸学において有力な地歩をしめた「インタープレタチオン」(作品解釈)(Werkinterpretation)の行きかたに添うていると見られもしよう。それで著者は、現在なお非常な影響をおよぼしているこの潮流にたいして考えるところを述べ、それによって自分の方法上の立場への自覚をつよめておきたい。ドイツ文学研究においてエーミール・シュタイガーやヴォルフガング・カイザーが先頭に立っている「解釈」的方法は、文芸が文芸であることに明確な自覚をも

って事にあたろうとする態度である。それは文芸を何よりも言語芸術作品という特質から摑もうとする。文芸研究者にとってかかわりのあるのは、ただ詩人のことばであり、ことばにおいて実現されているものである。在来の研究は、作品を文芸外の現象と関連させ、そこに根柢的なものを探り、それの反映として作品を見たのである。こうして詩人の世界観とか伝記とか、時代や社会や民族性等々の要素を重く見、その結果はしばしば芸術を、哲学や社会科学やまた自然科学的関心の犠牲にしてしまった。そういう行きかたには理由もあり、それがあげた業績も非常に大きいのではあるが、それによって言語芸術作品の本質がないがしろにされ、したがって文芸研究の本来の課題が見すごされたのではないかという疑いが起こるのは自然のことである。文芸は、他のなにものかの反映ではなく、それ自体において独立性をもった言語構成物であって、それぞれの作品を全体としてつかむことこそ何よりも優先されるべきである。以上のようなことが主張され、また、それに従って注目すべき仕事がおこなわれているのであるが、歴史的に見れば、これは文芸学があまりに副次的な方面に走りすぎたことにたいする、文芸の立場からする復元運動であると見られる。事実、対象が文芸であることを忘れて、真の文芸研究がありえようはずはない。ディルタイ以来、精神科学が自然科学にたいして精神科学としての自覚を立てたのは周知のことであるが、その一環としての文芸学における在来の諸研究法が、それにもかかわらず文芸外の諸要素にかかわりすぎた観を呈することが多かったとすれば、それは言語芸術作品としての文芸に触れることは、ことわるまでもない当然のこととして、すでにそのことはなしえてあるという暗黙の前提のもとに、さらに文芸をひろい連関において把握しようと、文芸外の領域に入りこんだのであろう。しかし、文芸そのものとの接触を自明のこととしたことは、いつしかこの主要点をおろそかにさせ、しばしば主客顚倒を招くことになった。それにたいして、インタープレタチオンの方法が上述の主張をもって登場したのは、歴史上のひとつの必然であって、それによって、文芸学はよりつよい自覚と信念をもって、文芸の本質に迫ろうとしており、その方法は実習によっていよいよ精

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com